

越 讚 歌

えっちゅうさんか

生まれ育ったのは城端でも田圃地帯の農家であった。当時、月のない夜は一寸先は闇で、懐中電灯が必需品であった。おかげで肉眼でも天の川がよく見えただけである。

小学校のときに、中学生だった姉が学校で販売していた口径三秒の小さなレンズと筒の望遠鏡を買ってきてくれたので、それを木で自作した台に取り付けて月のクレーターや惑星をよくのぞいていた。さらに中学校では(今だからこ言えるのだけれども)理科のある先生がこっそりと夜に理科室に入る方法を教えてくれて、そこにあつたもう少し大きな望遠鏡を取り出してひとりでのぞいていたものである。もしバレたらその先生は学校上層部に叱責されていたことだろう。

このようなことがめくり巡って天文の道を志すことになったよつである。

■ひつじ四国へ

道はえらく曲がりへねっていた。中学校を卒業するときに県立高校の普通科と四国にある船舶通信士養成の職業高校(一年



天文の道

中井 直正



なかい・なおまさ 天文学者、筑波大学教授。電波望遠鏡で銀河の中心を観測し、巨大質量ブラックホールが存在するという確証を最初を得た。昭和二十九年、南砺市(城端)生まれ。城端中学校卒。詫間電波高専から関西学院大学に編入して卒業。東京大学大学院修士課程。東京大学、国立天文台を経て現職。平成八年に仁科記念賞。二十一年に日本学士院賞。茨城県在住。

後に高専に昇格)を受験し、共に合格した。訳あって四国の学校の方に進学しようとしたけれども、三年の担任だった細川よし子先生は大反対だった。「あなたは普通科に行つて大学に進学しなさい」と。

しかし、四国の学校の最終試験を受けてその場で合格がわかったとき、ありったけの小銭を用意して足りるかどうか心配しながら四国から中学校の先生のところへ長距離電話をかけた。先生の意には反するが、「県立

高校の方を断つて下さい」と。辞退するために自分の印鑑を預けておいたのである。受話器の向こうで「わかったから、無事に帰つて来なさい」と聞かされた。

ひとりで五つの列車と二つの連絡船を乗り継いで城端に戻ってきた翌日、学校最後の日として(卒業式は前日に終わっていた)職員室にあいさつに行つた。しかし驚いたことに先生はまだ印鑑を押ししていなかった。

「あなたが城端に戻つてくる間に気が変わるかもしれないと

恩師の執念が実る

思つて

「そこまで思つていてくださったのかと絶句した。しかし、意思は変わらなかつたので、県立の方を断つてもらつた。親

不幸者ならぬ恩師不幸者である。それでも最後だといつたので、先生は校舎の玄関まで見送りに来てくださった。そして言われた言葉が「職業高校でも、がんばれば大学に行けるから」。なんとしぶとい! なんとしてでも

大学に行かせたいといつ

執念か! そして最後に、「向こうに行つたら近況を知らせてね」。

かくして四国は香川県の詫間町というまわりはミカン畑だけという田舎に行き、旧海軍航空隊の木造兵舎を教室として青春の半分をモールス信号に費やした(ただし一カ月後にはコンクリート製の新校舎に移動し、兵舎はクラブ活動の練習場となった。今でもモールス信号のSOSは覚えていて、いつか遭難したときには役に立つかもしれないと思つていたら、そのうちモールス信号は廃止されてしまった。衛星回線の電話やファクスで十分なのである。

そして、月日がたち、いつの間にか気がついたら(ではないが)……先生の言われた通りにな

つていた。大学、大学院と行って天文の研究者になつていたのである。しかし、いったん通常の道を外れた者が研究者へのレールに乗るには、筆舌に尽くしがたい苦難の道が待っていた。それがため、大学院で博士の学位を取つたのは通常より三年も遅れた三十歳のときであった。そのあとさらにオーバードクターを三年半もすることになって将来を悲観していた。

ところがである。助手のボス

トが突然空いたので、そこに就職することになった。一度運が向いてくると、あとはひたすら幸運の連続。「果報は寝て待つ」といふので寝てばかりいたら、不思議な現象を偶然に見つけてそれが結果として巨大質量ブラックホールの検出につながり、いつの間にか賞もいただけることになった。しかし、寝る前には入念な準備も必要であることをつ悟つた。

長い研究人生にはいろんなことがあつた。数百億円の大規模遠鏡計画や組織として全く新しいことを始める場合、多くの人間を説得する必要がある。提案した計画がまわりに理解されず、二度ほど胸に辞表を入れて

ことに当たつた。最終的にはうまくいって辞表を出さずに済んだが、その過程においては絶望的な孤独感や焦燥感に襲われたものである。研究には忍耐と使命感と、少しの樂觀主義が必要であつた。

中学校の玄関で別れたあと、先生には一度も近況報告の手紙もはがきも出さなかつた。やはり、恩師不幸者である。昨年、招待されて初めて城端で講演を行ったとき、よし子先生も聞きに来てくださった。何十年ぶりの再会である。そして、先生は話すと、涙、涙で……。あの中学校のときの先生の執念が乗り移つて、これまでの研究を支えてもらったのかもしれない。

毎週土曜に掲載します



「山田川」 柳田 邦男 南砺市